

高島市 歴史散歩 No.5

高島市の義経伝承

源平の争乱の活躍で名高い源義経は、平家追討に多大な功績をあげながら、その前後は数奇な運命をたどったことや、悲劇的な最後を迎えたことから、死後は、多くの人々の同情をあつめ、いくつもの物語や伝説に語り継がれるようになりました。

なかでも、室町時代に成立した「義経記」は、義経の幼少時代と、兄・頼朝に追われて奥州へ向かう旅のようすを記したもので、数ある義経を主人公とした物語のうちで、最も有名なものとして知られています。

この「義経記」のなかには、大津から北陸へ向かう義経一行が、高島市を通る場面が登場します。巻七「大津次郎の事」には、義経が商人大津次郎という人物の助けを借りて、大津浦から船に乗って琵琶湖を北上し、「今津の浦を漕ぎすぎて、海津の浦にぞ著きにけ

る」と、今津を過ぎて海津に上陸し、さらに北国を目指していくようすが描かれています。現在、マキノ町海津浜には「義経の隠れ岩」と呼ばれる、人がかがんで入れるほどの穴のあいた岩があり、海津に着いた義経がこの岩に身を隠したという伝承が残っています。



義経の隠れ岩

また、今津町北仰には、北国へ向かう途中の義経一行が北仰に現れ、一夜の宿を請うことがあったという伝承が伝わっています。村人たちは白米や野菜を持ち寄ってもてなし、一行は翌朝、感謝の印に村人に太刀を与え、海津方面へ落ち延びていったといえます。北仰の人々は、その太刀を彼らの食べ残

した白米とともに埋め、塚を築きました。これが、現在に残る白米塚だといわれています。また一説には、この地の僧が残った白米に「南無阿弥陀仏」の名号を書き込んで、土中に埋めた場所とも伝えられています。



白米塚

北仰の伝承は、船で海津に着いたという「義経記」の記述とは矛盾しますが、この白米塚の話は、高島市付近を通って北国へ落ち延びていったであろう義経一行への、地元民の哀れみや同情の気持ちが生み出したものといえるかもしれません。

(文化財課)

高島市

編集後記



懐かしい雰囲気が
浜通りにあふれていました。
(今津アートクラフトフェスティバル)

▼春は活力あふれる季節。市内でも多くのイベントが開催されています。ウキウキ気分取材に出かけると、どの会場にも当たり前ですが、縁の下力持ちがたくさんいてくださいます。お店や司会で盛り上げる人、黙々とゴミを片づける人、交通整理をされている人、連絡や調整に走り回っている人。大勢の人の「元氣」をどこの会場でも感じます。皆さん、本当にありがとうございます。▼5月25日には初の市内全域を対象にしたイベント「チャレンジデー」が開催されます。(詳しくは8頁をご覧ください。)普段の運動習慣と健康生活を考える住民総参加イベントのチャレンジデーに皆さんぜひご参加ください。

(広報担当)

R100

白紙印刷用紙100%再生紙を使用しています。

高島市 歴史散歩

No.11

日本舞踊や歌舞伎でも知られる伝説の女性 ―海津のお金―

古くから京と北陸を結ぶ交通の要衝として、また湖北の主要な港町として栄えたマキノ町海津には、逃げ出した暴れ馬を「お金(兼)」という力持ちの女性が、手綱を高下駄で踏んで捕まえたという「怪力お金」の伝説が残されています。

今から約千年前、大番役を勤めるため、馬で京に向かっていた武士が、海津に宿泊し、浜辺で馬を洗っていたところ、何かに驚いたのか馬が突然走り出しました。その場に居合わせたもの誰もがとめるすべもなく、立ち騒いでいたところ、たまたま通りかかったお金という女性が、少しも慌てず高下駄で手綱の端を踏んで、奔走する馬をやすやすと止めました。この時、高下駄は砂に食い入って足首まで埋まったといいます。この様子を見ていた武士や周囲の人々は、

お金の怪力ぶりに大変感心し、お金の名前は一躍有名になったといえます。

この話は、鎌倉時代に成立した『古今著聞集』にも載せられていて、広く知られた説話であったと思われます。しかし、このお金については、本当に実在の人物であったのか、どこの生まれで、どの辺りに住んでいたのかなど、詳しいことは分かっていません。ただ、海津中小路町の福善寺には、お金の墓といわれる石塔が残り、今に伝えられています。



福善寺境内にある
お金(兼)の墓



奉納舞踊の前に
お金(兼)の墓前に手を合わせる子ども

また、日本舞踊や歌舞伎の世界では「藤娘」などともに有名な長唄「近江のお兼」という作品は、この海津に残る伝説の主役である、お金(兼)をモデルとしてつくられたといわれており、現在もお金(兼)の命日とされる11月23日には、毎年、日本舞踊関係者らによって、墓前法要が行われています。(文化財課)

▼スポーツの秋。市内各地では集落ごとの顔が繋がる伝統の運動会が開催。また、マキノの栗マラソンや高島ガリバーマラソンも、例年以上の盛り上がりの中、開催されました。地域の体育委員や大会スタッフ、体育協会や体育指導委員会の皆さんの熱い想いと見えない部分での尽力に心から感謝です。スポーツは健康を創り、健康は元気を創り、元気はまちを創る。僕も自分の弛んだお腹を猛省して自転車通勤を始めました。環境にもちよつと貢献できる? みなさんも一緒にどうですか。▼今月号の表紙では社会人野球のクラブチーム設立をお伝えしました。久しぶりの明るいビッグニュースです。欽ちゃん球団やサッカーJリーグの地域チームのように、市民の皆さんと共に応援して盛り上げていけたら素敵だなと思います。野球大好き少年達の夢への道も拡がり、将来的には高島からメジャーリーガーが登場するかも!? です。深くもの思う秋。たまには損得抜きの一杯の夢物語を、語ってみませんか。(広報担当)



大家友和ベースボールクラブ高島クラブチーム設立記者会見の様子(10月19日)

編集後記

100万年前のゾウの足跡化石

～安曇川町上古賀地区～

安曇川町上古賀地区の安曇川河川敷一帯には、ゾウの足跡化石や昆虫・植物化石が存在します。これらの化石は、一昨年の台風の水増しにより河床が削られ、発見されました。文化財課では、この失われた足跡化石を適切に記録・保存する目的で、昨年10月、こども達や市民による調査団を結成しました。調査では高島累層研究会・滋賀県足跡化石研究会・琵琶湖博物館の方々と共に、発掘や図面作成・樹脂による型取りを行い、詳細な足跡化石の状態や様子を調べ、ゾウのいた時代の様子もわかってきました。

発見された足跡化石は、ゾウなどの長鼻類121点、シカなどの偶蹄類7点を含み総数128点に及びます。

足跡化石が含まれる地層は、その周辺の地層に含まれる火山灰層から古琵琶湖層であることが最近明らかになってきており、発見された足跡



「調査の様子」



「発見された象の足跡」

化石は、今からおおよそ100万年前の足跡化石と考えられます。周辺の地層からは、ハンノキやコナラ・クルミ・エゴノキ・ミツガシワなどの植物化石や、ミズクサハムシ属やネクイハムシ属などの昆虫化石も発見されています。これらの産出した化石から、足跡化石が残されたところは、水辺や湿地環境が存在し、ゾウやシカが生息していたと推定されます。このように、これらの化石は、当時の環境を復元するうえでも、貴重な資料で、かつては高島にもゾウが

いたことを証明する画期的な発見となりました。この調査で型取りしたゾウの足跡や昆虫・植物化石は、下記の学習会で報告・展示します。ぜひ、ご覧ください。

安曇川河床足跡化石調査報告会

— 今、よみがえる！ —

100万年前のたかしまー

●日時 3月4日(土)

13時30分～16時

●場所

安曇川町藤樹の里ふれあいセンター 2階 視聴覚室

●内容

調査の成果から、100万年前の高島の姿をさぐります。

※当日は、調査内容をわかりやすくまとめた資料集をお渡しします。

(文化財課)

編集後記



「今年はもう大変やわ」と話してくださったお婆ちゃん。屋根雪を一輪車に積んでは近くの川までほかに運びます。(マキノ町白谷にて)

▼今月の表紙では、今春から今津スタジアムを本拠地に活動を開始する大家友和ベースボールクラブのイベントを紹介。この日は午前中に野球教室、午後から講演会やサイン入りグッズ抽選会等が行われました。講演の中で「新しい高島市と一緒にチームも成長して強くなりたい」と話された大家選手。今月には、いよいよ監督や選手、ユニフォームも発表される予定です。子どもからお年寄りまでみんなが楽しめるチームとなるように応援したいですね。▼年末から記録的な大雪に見舞われています。(16～17頁に関連記事)市内でも雪かき、屋根雪下ろしに皆さん本当に大変な思いをされていると思います。市では、いざという時に迅速に対応できるよう1月11日に雪害警戒本部を設置しました。一方、大人達の思い等関係なく、元気なのは子ども達。積もった屋根雪を利用してかまぐらやトンネルを造って遊ぶ姿は本当に楽しそうです。僕もつられて本気でかまぐらを造ってしまい、現在は腰痛と戦い中。皆さんも風邪や腰痛には十分に注意ください。

(広報担当)

高島市 歴史散歩

No.22

明治時代の小学校

日本の近代学校制度の整備は、明治5年(1872年)の学制の発布によって始まりました。それまでの江戸時代の学校には、藩校などの武家の学校と、寺子屋などの庶民の学校という二系統がありましたが、だれもが教育を受けられるわけではありませんでした。それを学制では、小学校を人民一般が必ず教育を受けるところと定め、各府県に小学校の設置をうながしました。



武曽学校

市内では、明治5年から9年ころにかけて、次々と多くの小学校が設立されました。ほとんどの小学校が、現在よりも規模はやや小さめで、2〜3集落程度が1校の学区となっていました。

小学校の名称は、旧高島町の鴻溝学校(鴻溝は大溝の別名)や今津町の鴨野学校(鴨野は学校設置場所付近の小字名)、朽木の平川学校(対象学区は平良と小川)のように地名に由来するもの、また安曇川町の弘智学校や新旭町の国修学校のように、当時の教育思想に沿って名づけられたものなどさまざまでした。この後も近代学校制度は、明治4年に定められた文部省の欧米の制度を模範とする方針に沿って、この後、急速に整備が進められました。明治19年の小学校令の制定では、小学校を義務教育とし、尋常小学校、高等小学校、ほかに小学簡易科で編成することが定めら



れました。また明治23年には新しい小学校令が制定され、このころから、いずれの学校でも児童数は急激に増加するようになっていきました。旧高島町の武曽横山には明治11年に建てられた武曽学校の建物が現在も残っていて、近代学校建築を今に伝える貴重な遺構として市の文化財に指定されています。(文化財課)



編集後記

▼幼稚園・保育園の園児たちが、市内の高齢者をお祝いしようと、絵はがきを描いてくれました。カラフルなペンを使って一枚一枚丁寧に、そして思いを込めて描かれた絵はがきには、温かさが満ち溢れています。伝えたい気持ちで、ペン先からあふれ出るのかもしれない。▼9月は運動会でしたね。今月の表紙は、今津北小学校の運動会の様子をご紹介します。背丈の倍ほどもありそうな竹馬に乗ってグラウンドをぐるりと一周。見上げる子どもたちの姿は堂々たるもので、いつもとは異なる目線にドキッとし、思わず後ずさりしてしまします。普段、子どもたちの「コミュニケーション」で、見下ろす目線が多いことに気づきます。子どもを理解するにはまず、子どもたちの目線に立つことが大切と言われます。子どもたちの成長とともに、その目線は変化していきますが、そうなる前に子どもたちと同じ目線で見て、考えて、感じとるようにしたいものです。「Understand」という英単語は、「(under)に立つ(stand)」で「分かる、理解する」という意味があります。子どもたちの目線のそのまた下から見上げると、さらに大きな発見があるのかもしれない。(広報担当)

高島市 歴史散歩 No.25

正月の儀礼と行事

高島市内では、現在も各地域や家庭などに、さまざまな正月の儀礼や行事が受け継がれています。

正月は、いうまでもなく新年の始まりであり、新しい年を迎える大切な時期として古くから数多くの儀礼や行事等が行われてきました。

正月に年神がやどる目印として家の入口に飾られるのが門松です。門松は、平安時代の貴族



▲神社の正月飾り

の日記にも登場するほどの古い習慣で、飾るものは必ずしも松に限らず、榊やヒイラギなど



▲ヤソツボ

よく飾られました。また地域によつては、門松に、年神への供え物を入れるための藁でつくった食器をくくりつけることがあり、これに近い習慣は、市内でも今津町日置前で「ヤソツボ」と呼ばれる藁の食器を作る例に見られます。

また家の入口の扉などに飾られることの多い注連縄は、神聖な場所を他の場所と区別するための縄で、本来は、家全体または部屋の四方にぐるりと長い縄

を張り巡らすものでしたが、今では略されて家の入口や屋内の神などに張られることがほとんどです。

正月の朝は、若水汲みから始まります。若水は、一家の主人が汲むものとされ、その水を使って雑煮が作られます。市内では、この雑煮を男性がつくるもの、としている地域が多く、これも古くからの正月の習慣の一つです。正月料理には、縁起の良い材料がよく用いられ、子孫繁栄を意味する「数の子」、まめなように「黒豆」、豊作を願って「田作り」、腰がまがるまでの長寿を祈って「海老」、出世を願って「頭芋」などがよく使われ、これらを使ったおせち料理は現在も各地で見ることができます。

(文化財課)

編集後記



雨上がり、太陽の光に誘われて、空に大きな橋が架かります。
(新旭町針江にて)

▼高島時雨の時期は、美しい虹がよく観られます。虹は、空を眺める余裕を思い出させてくれます。虹の色は赤・橙・黄・緑・青・藍・紫の7色です。この色の数がドレミの7音階から決まったと聞くと、虹を見ると、さらに夢が広がります。

▼澄み切った空に、色とりどりの熱気球が浮かびました。今月の表紙は「第30回熱気球琵琶湖横断」の様子をご紹介します。熱気球はハンドルなどで行く方向を決められないので、行きたい方向の風を捕まえるのがパイロットのテクニック。でも、風は目に見えないので、肌で感じ取ったり、雲や木々の動き、鳥や虫の動きまでも見て、地上からの情報や、熱気球に当たるかすかな風の音などを聞き、その風の層にいられるよう温度調節をするとか。自然を相手にするには、研ぎ澄まされた感覚が必要ですね。私たちにもそんな感覚を磨いて、刻々と変化する風をつかみたいものです。

(広報担当)

高島市・芭蕉の句碑めぐり

江戸時代中期に、さび・しおり・かるみで示される幽玄閑寂の蕉風俳諧を確立するとともに、生涯にわたって旅を続け、数多くの俳句や紀行文を残した松尾芭蕉は、近江（滋賀県）の風光と人々をこよなく愛し、たびたび近江を訪れ、滞在していたことが知られています。このため当然のことながら、近江には多くの門弟が生まれ、さまざまな活躍していたことがうかがわれます。

こうしたことから、近江国内には、芭蕉の門弟や、後の時代に芭蕉の俳風を慕う人々によって、多くの句碑が建立されています。

高島市内にも、いくつかの芭蕉句碑が残されていますが、実際に、芭蕉が高島

の地を訪れて俳句を詠んだという記録はありません。

白鬚神社境内に建つ「四方より花吹入れて 塘の湖」の句碑は、安政4年（1857年）に、俳句・和歌・俳諧・茶道・華道など多くの道に精通し、青年の指導にあたったとされる森田石門（1832～1916年）が建立したものです。基右衛門自身も諸国の俳人を訪ね、多くの俳句を残しており、新旭町太田の西方寺境内には基右衛門の句碑が建てられています。また今津町浜分には芭蕉の「今



▲白鬚神社境内の句碑



▲今津町浜分の句碑

日はかり 人も年よれ はつ時雨」の句を刻んだ自然石の碑が残されています。この句は、芭蕉が元禄6年（1692年）10月に彦根の門人・森川許六のもとを訪ねたときに詠んだものであり、おそらくは、芭蕉を師とする門人の流れをくむ人々によってこの句碑が建てられたものと考えられます。

（文化財課）



より色濃く、より鮮やかな緑に、つい見とれてしまいます。

（くつきの森で）

▼ひと雨ごとに、緑が色濃く、より鮮やかに色づいていきます。「久しぶりに裏山でも散歩してみようかな。」そんな気分になさせてくれます。▼今月の表紙は5月4日から6日にかけて行われたJCF箱館山ジャパンシリーズJ-1大会のダウンヒルレースの様子をご紹介します。山頂から山麓までの約2kmのコースを4分足らずで一気に駆け降りるダイナミックなこのレースで、100分の1秒に懸ける選手の様子が手に汗握ります。高島を舞台に毎年開催されているこの大会には、世界を目指すトップアスリートも参戦しています。高島の地からオリンピック選手が…そんな期待に胸が膨らみます。

（広報担当〇〇）

編集後記

歴史散歩

No.34

椋川の学校

今・昔

明治5年(1872)の学制発布にともない、今津町椋川に初めて学校が設置されたのは、明治12年12月のことです。このときの学校は椋川学校と呼ばれ、校舎として椋川内の高善寺が使用されました。その後、児童数の増加にともない、明治10年8月に、宇尾集(現在の椋川ミナリスセンター付近)に新校舎が建てられ、名称も国の制度改革に伴い、数年の間に簡易科椋川小学校・三谷第四小学校・椋川尋常小学校と、改称が続きました。ただ、校舎は長年の使用で老朽化が進み、大正時代に入ると荒廃が目につくようになっていきました。

そのような中、椋川出身で、京都の書店商大谷家へ養子に入り、家業を継いだ後に帝國地方行政學會を創設し、成功をおさめた大谷仁兵衛氏が、自分の出身地である椋川の学校の荒廃が救しく、新築の必要があるなかで、村が資金不足に悩んでいることを伝え聞き、学校建設費用の寄付を申し

出ました。大正11年(1922)12月、現在の椋川分校敷地に完成した校舎は、鉄筋ブロック銅板ふき耐震耐火構造で、普通教室のほか、特別室・裁縫室・応接室・事務室・図書室・会議室・雨天体操場・水道設備などを備え、この当時としては異下でも他に類を見ないほどの充実したものでした。

この大谷仁兵衛氏が尽力した校舎が、鉄筋コンクリート2階建てに建て替えられ、現在の今津西小学校椋川分校の校舎となったのは、昭和54年(1979)のことです。このときも、大谷仁兵衛氏の遺志、椋川区の皆さんの思い、町の考え方、それぞれが合致したことで、分校としては大規模で、使いやすく、地域の人々の思いがこもった椋川ならではの校舎を建設することができました。

分校は、子どもの減少により、平成元年以来休校が続いており、現在は地域活動の場として、また市内一の天体望遠鏡やキャンプ場を持つ青

少年活動の場として利用されています。来年度からは私立通信制高等学校の主にスクーリング会場としての使用が計画されており、分校としての役目をいったん終了したのち、新たな活用がはかれることになっています。(文化財課)



▲今津西小学校椋川分校お別れ会(昭和54年撮影)

編集後記



お口の中にも広がる羅体ロマン
 (「古代ロマン弁当」
 完成発表会で)

▼高島調理師会が、高島特有の食材を利用した、古代食メニューを制作。古代の味を再現した「古代ロマン弁当」として誕生しました。11品が竹皮製の箱に詰められたこの弁当。注目は、牛乳を長時間加熱してつくるといふ古代のチーズ「カス」。当時は天鵝や大鰐などしか味わうことができなかったという代物で、その味は絶品。一口食べれば、羅体ロマンもわかること。お問い合わせは、南丁町光臨へマヌスアイ最初の公道を使つてのロードレースが高島市で行われました。今月の表紙は、9月15日(土)、16日(日)に行われた「日本スポーツマスターズ」自衛隊競技の様子をご紹介します。大会には、35歳から74歳の方がエントリー。年齢により男子8部と女子の部に分かれて約2000人が出場。レースでは、色とりどりのユニフォームに身を包まれた選手が集団を成し、大きく形を勢えながら周回を繰り返しています。駆け引きを繰り返してゴール前、コース一杯に広がった選手たちは、渾身の力をふりしぼってゴールに駆け込みます。そんな激命な選手の様子は、心の中に感動の嵐を巻き起こしてくれます。(編集後記)

歴史散歩

No.38

琵琶湖哀歌の誕生と四高桜

遠くかすむは春振城

彼に暮れゆく付生鳥

三井の晚鐘音絶えて

なにすすりほく嶺千鳥

の歌詞と東海林太郎の歌謡で知られる「琵琶湖哀歌」は、昭和18年4月6日に大溝沖で遭難した、旧制第四高等学校（現・金沢大学）の学生への追悼の意を込めて誕生しました。

四高の運動部は、昭和15年に大津の瀬田川で行われた全国大会で優勝をおさめ、18年の春は遠征優勝を目指して南湖で合宿練習をし、合宿の総仕上げとして琵琶湖の縦断をする事になりました。大津から今津へ向かい、2泊した後、大津へ戻るために4月6日の朝、



▲四高校の記念碑

今津を出発しました。通船は波の穏やかな日が多い琵琶湖ですが、この日は比良連峰から吹き下ろす風が予想外に強く、汽船部員11人を乗せたボートは、現在の萩ノ浜の沖合15キロメートルの地点で転覆してしまいました。

この知らせを受けた地元大溝の警察・役人・漁業関係者は、四高関係者らと協力し、必死の捜索活動を行いました。最後の遺体が発見されたのは、2か月余り後の6月10日であったといいます。

大溝では百ヶ日法要のときには供養のために町内の各戸が1個ずつ灯籠流しを行い、翌17年の1周忌には妙琳寺で法要が行われ、湖畔には四高関係者との協力



▲苗木の移植活動

によって千本の桜の苗木が植えられました。四高桜と呼ばれるこの桜並木は、長い間、関係者らの手によって守り続けられ、昭和80年には関西四高会の呼びかけで「琵琶湖四高桜保存会」が結成され、補植等が行われました。近年には、「四高桜を守り育てる会」による接木・補植活動も盛んに行われています。四高桜はこうして今も、多くの人に守られ、育ち続けています。

(文化財課)



キフリ！琵琶湖のタイヤ。(今津港で)

▼厳冬の琵琶湖の風物詩、氷魚漁が行われています。氷魚はアユの稚魚のこと、体が氷のように透き通っていることから、この名がついたといわれています。現在では主に放流用のアユ苗として獲られ、その希少性から琵琶湖のダイヤモンドとも称されます。琵琶湖のアユは、成長しても大きくならず、他の河川に放流して始めて大きく育つことから、他国に出て大成した近江商人に例えられます。激流で磨かれてこそですね。▼今月の表紙は、青高バレー(全国高等学校バレーボール選抜優勝大会)に出場される高島高校男子バレー部の皆さんをご紹介します。数多くの日本代表選手を輩出しているこの大会は、青春の日々をバレーボールに捧げた高校生たちの「夢の大舞台」。頂点を目指す全国の仲間と磨き合い、不断の努力の集大成に、輝く高島ダイヤ！

(広報担当)

編集後記

歴史散歩

No.51

ひな祭りと「古雛展」

ひな祭りの由来

立雛

三月三日
の上巳の節
句に、ひな
人形を飾り、
菱餅・白酒・
桃の花など



を供し家内の女兒の無事育成を祈る祭りを「ひな祭り」といいます。上巳とは三月始めの巳の日で、この日には、人形にケガレやワザワイをうつして川に流す行事が行われていました。この風習は遠く中国の漢の時代、今から二千年ほど遡るものといわれ、中国の古い風習と、日本古来のケガレを除くとするミソギの行事が重なって生まれたといわれています。今でも、鳥取や和歌山で流し雛の行事が行われています。

ひな祭りの遍歴

上巳の行事に使った人形は「ヒイナ」といわれています。平安時代、貴族の子女の間ではヒイナ遊びが行われ、時代が進むにつれて、立派な衣装を着けて調度品を配する遊びが「ひな祭り」に変化したと考えられています。

彩りのお雛さま

江戸時代になると多くのお雛さまが登場してきます。まず、紙で作られた立雛をはじめ、内裏雛には寛永雛・享保雛・次郎左衛門雛・有職雛・古今雛と多彩です。



古今雛

今日のひな祭り

お雛さまにはキャラクター雛なども加わり賑やかな一語につきますが、子どもの成長を祈る親心は不滅です。

(文化財課)

古雛展開催中!

高島



歴史民俗資料館では、現在「古雛展」を開催しています。ぜひ見学していただき、上巳の節句に思いを馳せてください。

▼期間

3月1日～3月31日
(休館日 月・火曜日)

編集後記



ザゼンソウが開花。今年は例年並み。

▼「今年はたまたま」と思っていた猛暑や暖冬。最近「たまたま」ではなくなっています。気象庁によると、日本の平均気温はこの100年で約1℃上昇しているそうです。人間にとって1℃の違いは大して気にならないのですが、地球にとって1℃の違いは大問題です。気温が1℃違えば、距離にして100km気候が変わるそうで、この100年で1℃上昇したということは、100km赤道に近付いたことになります。今の高島市は、100年前の淡路島と同じ気候ということになります。高島に春の訪れを告げるザゼンソウ。自生地は日本の南限にあたります。年に1kmずつ気候が南へ変わるとなると、すいぶん暮らしにくい環境になっただろうと想像してしまいます。幸い今年の開花は例年並みと聞くと何となくホッとしますが、これが「たまたま」でないことを祈らずにはいられません。温暖化という地球の微熱は、想像以上のダメージを伴います。早めの対策が何より必要です。1人の100歩より100人の1歩が、赤道への歩みを止めます。今日もひとつ、環境にイイコトしませんか? (広報担当)